



研究論文 (Articles)

「弱さを見せること」と「それが受け止められること」

——親密なパートナーに弱さをさらけ出せるようになるまでの体験プロセス——

谷 千 聖・原 田 梓・三 田 村 仰

(立命館大学大学院 人間科学研究科)

Showing vulnerability and it being accepted:

The experiential process of being able to expose vulnerability to intimate partners

TANI Chisato, HARADA Azusa and MITAMURA Takashi

(Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University)

The purpose of this study was to describe how the interaction between "showing vulnerability" and "it being accepted" was experienced within the couple from the perspective of the person showing vulnerability. Semi-structured interviews were conducted with six adolescents with romantic partners, and interview data were analyzed using Trajectory Equifinality Modeling (TEM). The results showed that after meeting a partner and experiencing a vulnerability that he/she could no longer carry alone, the process diverged into two paths: one in which the vulnerability was accepted by the partner, and the other in which they experienced conflict with the partner. Thereafter, the participants were divided into two paths: one in which they continued to experience acceptance of their vulnerability from their partner and developed a sense of security, and the other in which they were emotionally confused because their partner did not accept their vulnerability but overcame this confusion. Finally, a process was shown in which all participants became comfortable showing vulnerability to their partners. The results suggest that it may be important for couples to pay attention to their partner and respond to each other on the same wavelength, and be able to show vulnerability to each other to build an intimate bond.

本研究は、カップル内で「弱さを見せること」と「それが受け止められること」の相互作用がどのように体験されたかについて、弱さを開示する側の視点から記述することを目的とした。パートナーを持つ青年6名を対象に半構造化インタビューを行い、複線径路・等至性モデリング (TEM) により分析を行った。その結果、パートナーと出会い、弱さが一人で抱えきれなくなる体験をしたあとに、その弱さがパートナーに受け止められる径路と、パートナーとの間で葛藤を経験する径路に分岐することが示された。その後は、パートナーから弱さが受け止められる経験が続いて安心感が芽生える径路と、パートナーに弱さを受け止めてもらえずに感情的に混乱するも、それを克服する径路に分岐した。そして、最終的に、すべての参加者がパートナーに安心して弱さを見せられるようになるプロセスが示された。カップルが親密な結びつきを築くうえでは、相手に関心を向けて相手に波長を合わせた応答を行うことや、カップルでお互いに弱さが見せあえるようになることが重要である可能性が示唆された。

Key Words : Vulnerability, Couple, Interactions, Trajectory Equifinality Modeling

キーワード：弱さ、カップル、相互作用、複線径路・等至性モデリング

1. 問題と目的

1. パートナーとの情緒的な結びつきの構築

人間には本来的に特定の他者との間で情緒的な結びつきを形成しようとする傾向が備わっているとされる(Bowlby, 1988)。結びつきを形成する対象は、乳幼児期においては多くの場合養育者であるが、青年期に入るとその対象は友人やパートナー(交際相手)へと移行していき(Hazan & Zeifman, 1994)、とりわけ、パートナーがいる者は、パートナーとの間で結びつきを構築しやすいことが示されている(Doherty & Feenly, 2004)。

カップル内における安定した情緒的な結びつきとは、パートナーが互いに快適さや安心感を与えあうことができ、相手との心理的な距離が近く、安全な繋がりを感じられる関係性を意味する(Johnson, Makinen, & Millikin, 2001; Johnson, 2004)。一方で、パートナーとの結びつきが脅かされている場合、パートナーにしがみついたり、泣いたり、怒ったりといった方法でつながりを求めるようになり、カップル内での葛藤が生じる(Johnson, 1986)。たとえば、パートナーに見捨てられる不安を感じることは、パートナーに対して暴力的に振舞う傾向を増加させる(金政・古村・浅野・荒井, 2021)。また、パートナーとの分離に強い不安を感じることは、パートナーへの束縛行為の誘因となる可能性が示されている(片岡・園田, 2014)。したがって、いかにして、パートナーとの間で安定した情緒的な結びつきを構築できるかを検討することは重要な課題である。

2. カップル内において「弱さを見せること」と「受け止められること」

パートナーとの間で情緒的な結びつきを築くうえで重要となるのが、パートナーに弱さ(Vulnerability)を見せて、それがパートナーから受け止められるという相互作用の体験である(Cordova & Scott, 2001; Kanter, Kuczynski, Manbeck, Corey, & Wallance, 2020)。相互作用のきっかけとなるのは、カップルのうち一方が、もう一方に対して自身の弱さを開示することである。ここでの「弱さ」とは、その人が情緒的に傷つきやすくなっていたり、孤立や病気な

ど、弱っている状態に置かれていることを意味する(Collins, Guichard, Ford, & Feeney, 2004)。こうした自身の弱さをパートナーに晒すことには、結果的にパートナーから批判されたり、認めてもらえないといったことで、開示した側が心理的に傷つくという潜在的なリスクを伴う(Dorian & Cordova, 2004)。カップルのうち一方が弱さを開示したあと、もう一方(開示された側)はそれに対して何らかの反応を返す。そしてその反応が、弱さを開示した本人にとって「受け止めてもらえた」と感じられるものだったとき、その反応を返した相手に対する親密なつながりの感覚が高まるとされる(Maher & Cordova, 2021)。

3. 弱さを見せ合うことに関するパートナー間の相互作用のプロセス

こういった点を踏まえると、カップルが安定した情緒的な結びつきを築くためには、カップルのどちらか一方ではなく双方が、自身の弱さをパートナーに受け止めてもらえたという相互作用の体験を積み重ねることが必要と考えられる。しかし、こういった相互作用の体験は簡単に積み上げられるわけではなく、自身の弱さをパートナーに開示できなかったり、自身の弱さをパートナーに受け止めてもらえなかったと感じたりといった紆余曲折のプロセスが存在していると想定される。弱さを開示する側の視点からみて、パートナーとの間で「自身の弱さを見せること」と「それがパートナーに受け止められること」といった相互作用をどのように体験するかというプロセスを明らかにできれば、カップルが安定したつながりを構築・維持するために必要なサポートを特定することに寄与できるだけでなく、カップル当事者が自らの関係性を振り返り、お互いにとってよりよい関係を築くために何ができるかを考えることにも役立てられるだろう。

4. 本研究の目的

以上のことを踏まえ、本研究では、「普段は他者に見せないような自分の弱い部分を安心して見せられる関係」を親密な関係として定義し、パートナーとの間で親密な関係を築けていると感じられる個人

を対象にインタビューを実施した。そして、そういった関係性を築くまでの間で、「弱さを見せること」と「受けとめられること」に関してカップル内でどのような相互作用が体験されたのかについて、弱さを開示する側の視点から記述することを目的とした。

なお、本研究では青年を対象に調査を実施した。わが国において、多くの青年がパートナーとの関係について不安を感じており（相羽, 2017）、パートナーとの関係が不確実なものに感じられることは精神的な不健康と関連することが明らかにされている（清水・大坊, 2005）。さらに、パートナーに見捨てられてしまう不安を感じることは、アイデンティティの形成にネガティブな影響を及ぼす可能性も示されている（川本, 2015）。よって、本研究の実施によって青年がパートナーと安定した関係性を築くための手がかりが提示できれば、青年の心理的健康の向上のみならず自我発達の促進に貢献できる点で意義があると考えられた。

II. 方法

1. 研究デザイン

本研究では、インタビューデータを TEM (Trajectory Equifinality Modeling : 複線径路等至性モデリング) により分析した。TEM とは、その人が生きてきた時間を捨象せずに、個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする質的研究法である（安田・サトウ・荒川, 2012）。TEM では、個々人が固有な径路を辿ったとしても、時代背景や属する社会集団などの文化・社会的な制約や、人の生涯発達の要件が複雑に交絡することにより、時間経過の中で等しく到達するポイントがあると考えられる（安田, 2005）。この等しく到達するポイントのことを等至点 (Equifinality Point : EFP) と呼ぶ。そして、個人が等至点に至るまでの径路を、径路が分岐するポイントである分岐点 (Bifurcation Point : BFP)、ほとんどの人が制度的・慣習的・結果的に経験せざるを得ないポイントである必須通過点 (Obligatory Passage Point : OPP) といった概念ツールを用いて描き出す（安田, 2015）。径路における個人の選択に影響を及ぼした力のうち、等至点に近づけるように働く力は社会的助勢

(Social Guidance : SG)、等至点から遠ざけるように働く力は社会的方向づけ (Social Direction : SD) と呼ばれる（荒川・安田・サトウ, 2012）。なお、等至点は研究目的によって設定されるが、等至点を定めることにより、研究者がある特定の事象が達成されることが好ましいという価値観や信念を抱いてしまうことがある。このことを回避するために、等至点とは逆の現象である両極化した等至点 (Polarized EFP : P-EFP) を設定することで、より多様な径路に目配りしながら分析を行うことが可能になる（安田・サトウ・荒川, 2012）。

本研究は、パートナーと親密な関係を築くまでの間で経験される、カップルの相互作用のプロセスにおける共通性と多様性を捉えることを目的としていた。よって、この研究目的に沿った研究方法として TEM が適切であると考えた。なお、研究目的を踏まえ、本研究では EFP を〈パートナーに安心して弱さが見せられる感覚を抱く〉、P-EFP を〈パートナーに安心して弱さが見せられる感覚を抱かない〉と設定した。

2. 研究協力者

本研究の調査にあたっては、パートナーとの間で親密な関係を築けていると感じている青年を対象とした。青年を対象に調査を実施するうえで、研究協力者によってこれまで経験してきたライフステージが大きく異なる場合、カップル内での相互作用の体験の仕方やそれに影響を与えた要因も異なることが想定され、径路における共通性が見出せない可能性が考えられた。したがって本研究では、発達心理学的観点から青年期を「18歳～25歳の大学生、大学院生」とする原田（2012）などを参考に、青年の中でも「18歳～25歳の大学生、大学院生」の者に焦点を絞って調査を実施した。また、本研究はカップルでの相互作用のプロセスを記述することを目的としており、交際期間が短いと、そのプロセスを十分に捉えきれない可能性が考えられた。したがって、青年の中でも「パートナーとの交際期間が1年以上」の者に焦点を絞って調査を実施した。SNS に募集チラシを掲載し、上記の条件に当てはまる研究協力者を募集したところ、調査協力の同意に至った6名を

対象にインタビュー調査を実施した(Table1)。なお、いずれの研究協力者も異性愛カップルであった。

本研究では、研究協力者がパートナーとの間で良好な関係性を築いていることを数量的な側面からも確認しておく目的で、2つの尺度への回答を求めた。第一に、パートナーへの親密性を測定するため、Sternberg (1997) の作成した Triangular Love Scale の邦訳版(金政・大坊 2003)における「親密性」の下位尺度を使用した。第二に、カップル関係の満足度を測定するため、Funk & Rogge (2007) の作成した Couple Satisfaction Index の邦訳版(Mitamura, Hitokoto, Tsuchiya, & Tani, 2022)を使用した。本研究におけるいずれの研究協力者においても、二つの尺度に関して、先行研究(Tani & Mitamura, 2022)における青年118名の平均値以上の得点を示していた。

Table1 研究協力者のプロフィール

事例	年齢	性別	交際期間
Aさん	24	男性	11年2か月
Bさん	24	女性	5年0か月
Cさん	22	女性	2年2か月
Dさん	21	女性	2年1か月
Eさん	23	女性	3年1か月
Fさん	23	女性	2年8か月

3. データの収集

2022年1月から2022年3月にかけて半構造化インタビューを行った。インタビューは個別で、対面もしくはオンラインにて実施した。対面の場合は大学の実験室、オンラインの場合はビデオ会議サービスZoomを使用した。インタビュー回数は各研究協力者につき計2回であり、インタビュー時間は1回につき90～120分であった。インタビュー時の様子は研究協力者からの同意を得て録画ならびに録音を行った。

インタビュー実施に先立ち、研究協力者に対してWebフォームを送付し、基本項目(研究協力者の年齢、性別、職業、パートナーの年齢、性別、職業)および上述した2つの尺度に回答するよう求めた。また、研究協力者にメールを送付し、インタビューではパートナーに対して“自分の弱さを安心して見せられる感覚”が変化するプロセスについて尋ねる

こと、そのプロセスをよく理解するため、インタビューの冒頭でパートナーに弱さを見せられる感覚が高まったり下がったりした変化の度合いを時間軸上の曲線(ライフライン)で描いてもらい、そのライフラインを参考にしながらインタビューを進める予定であることを伝えた。

1回目のインタビューでは、はじめに、パートナーに対して自分の弱さを安心して見せられる感覚が変化したプロセスについてライフラインを描くよう求めた。ライフラインを参考にしながら、Table2のインタビューガイドに沿って半構造化インタビューを行った。2回目のインタビューでは、1回目のインタビューの内容をもとに作成した個人のTEM図を提示し、内容に相違がないか確認作業を行った。研究協力者からTEM図の修正や補足箇所についてのコメントをもらい、研究者がさらに知りたいと感じた点について尋ねた。

Table2 インタビューガイド

- | | |
|----|--|
| Q1 | 出会った当初、パートナーに対する印象はどのようなものでしたか？ |
| Q2 | その後、パートナーとの関係性はどのように変化していききましたか？ |
| Q3 | 交際前と交際後で、パートナーに対する印象に変化はありましたか？ |
| Q4 | ライフラインが上昇・下降する起点においてどんな出来事があったか教えてください。 |
| Q5 | (ライフラインの区間を指定して)この地点で、パートナーに弱さを見せられる感覚はどのように変化したか教えてください。 |
| Q6 | パートナーに対して、“この人なら、自分の弱い部分を安心してみせられる”と感じたきっかけになった出来事がありますか？ |
| Q7 | パートナーに対して、自分の弱い部分をみせることに対するためらいや不安が生じた出来事がありますか？ |
| Q8 | パートナーに対して安心して弱さをみせられる感覚が高まるまでのプロセスにおいて、パートナーとの関わり以外で大きな影響を及ぼした出来事がありますか？ |
| Q9 | もし、今現在、パートナーに対して安心して弱さを見せられる感覚が持てていなかったとしたら、どうなっていたと想像されますか？ |

4. データの分析

データの分析は、荒川・安田・サトウ（2012）を参考に行った。以下に、個人の TEM 図と全体 TEM 図に分けてデータの分析方法を示す。なお、見出しおよびラベルの作成、TEM 図の作成は第 1 著者が行った。分析内容の妥当性を高めるため、第 2、第 3 著者のそれぞれからも意見を得た。

(1) 個人の TEM 図の作成

はじめに、インタビュー内容の逐語を作成し、文字データを意味のまとまりで区切って見出しをつけた。次に、見出しをその研究協力者が経験した順番に並べ、見出しと見出しを線でつなぎ、EFP に至るまでの径路を図式化した。さらに、SG や SD といった TEM の概念ツールを設定することで、個人の TEM 図を作成した。2 回目のインタビューで聞き取った内容を踏まえて TEM 図を修正し、最終的な個人の TEM 図を完成させた。

(2) 全体 TEM 図の作成

はじめに、各研究協力者の見出しをその研究協力者が経験した順に並べた。次に、研究協力者間で類似した経験を含んでいる見出しをまとめて、ラベルを作成した。その中で、研究協力者全員が経験して

いた出来事を暫定的に OPP と定めた。そして、ラベルとラベルを線でつなぎ、EFP に至るまでの径路を図式化した。その後、BFP、P-EFP、SD、SG といった TEM の概念ツールを設定することで、全体 TEM 図を作成した。作成した全体 TEM 図を見ながら個人の経験の変遷が追えているかを確認し、適宜修正を加え、最終的な全体 TEM 図を完成させた。なお、本研究において使用した TEM の概念ツールと本研究における意味づけは Table3 の通りである。

5. 倫理的配慮

本研究は、立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会により承認を受けて実施された(審査番号：[REDACTED])。研究協力者には、本インタビューの内容や、インタビューへの参加は強制ではないこと、データの取り扱い等について Web フォーム上および口頭で説明し、書面で同意を得た。

III. 結果

研究協力者 6 名分の TEM を統合し、弱さを開示する側の視点からみた、「弱さを見せること」と「それが受け止められること」に関するカップル二人の

Table3 TEM の概念ツールと本研究における意味づけ

概念ツール	本研究における意味づけ
等至点 (Equifinality Point : EFP)	「パートナーに安心して弱さが見せられる感覚を抱く」
両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point : P-EFP)	「パートナーに安心して弱さが見せられる感覚を抱かない」
必須通過点 (Obligatory Passage Point : OPP)	「出会い」 「交際が始まる」
分岐点 (Bifurcation Point : BFP)	「弱さが一人で抱えきれなくなる」 「弱さが受け止められる体験が積み重なる」
社会的助勢 (Social Guidance : SG)	「友人の存在」「一緒にいる時間の長さ・連絡頻度の高さ」「パートナーから大切にされていることを実感する体験」「ストレスの増大」「お互いの関わり方を反省」「一緒に過ごす楽しさを再確認」「学生生活の終わりが近づく」「パートナーに弱さを受け止められた体験の積み重ね」「パートナーから弱さを見せられた体験の積み重ね」
社会的方向づけ (Social Direction : SD)	「交際経験のなさ」「パートナーへの遠慮」「ネガティブな予期」

相互作用のプロセスについての全体 TEM 図を作成した (Figure 1)。結果を記述するうえで、経験された行為や出来事、EFP、OPP、BFP は 〈〉、SG や SD は 【】、個人の語りは 「」 の記号を用いて示す。

研究協力者 6 名の個別 TEM を概観した結果、OPP として 〈出会い〉、〈交際が始まる〉の 2 点を設定した。BFP として 〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉、〈弱さが受け止められる体験が積み重なる〉の 2 点を設定した。EFP として 〈パートナーに安心して弱さが見せられる感覚を抱く〉、P-EFP として 〈パートナーに安心して弱さが見せられる感覚を抱かない〉を設定した。OPP・BFP・EFP を基準として EFP に至るまでのプロセスを 3 つの時期に区分した。第 1 期を 〈出会い〉から 〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉、第 2 期を 〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉から 〈弱さが受け止められる体験が積み重なる〉、第 3 期を 〈弱さが受け止められる体験が積み重なる〉から 〈パートナーに安心して弱さが見せられる感覚を抱く〉とした。

以下では、はじめに、3 つの時期ごとに研究協力者によって経験された出来事や感情、考えについての詳細を記し、弱さを見せることに関するカップルの相互作用のプロセスを記載する。次に、プロセス全体を通して SG として機能していた【一緒にいる時間の長さ・連絡頻度の高さ】ならびに【友人の存在】の 2 点について説明する。最後に、研究協力者が「弱さを見せて受け止められた」体験をしたときの、研究協力者ならびにパートナーの行動リストを示す。

1. 弱さを見せることに関するカップル二人の相互作用のプロセス

(1) 第 1 期：〈出会い〉から〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉まで

A さん、D さん、E さん、F さんの 4 名からは、大学やバイト先などでパートナーと〈出会い〉、徐々に話す回数や SNS でのやりとりが増え、どちらからともなく〈自然に仲良くなっていった〉ことが語られた。一方、B さんと C さんは出会いのあと、〈パートナーから好意を示される〉体験をした。C さんは、パートナーが積極的に話しかけてくれたことがきっかけで次第にパートナーとの仲が深まった。B さん

はパートナーから遊びに誘われることが続いたものの、【これまで誰かと交際した経験がなかったため】相手の意図が掴めず、パートナーに対して不信感や戸惑いを覚えていた。しかし、【友人】に相談してアドバイスを貰いながらパートナーと関わるうちに、不器用ではあるが一生懸命好意を表現してくれるパートナーに惹かれ始め、また、パートナーの不器用な部分について、人間らしい安心感を覚えたことも語られた。その後、研究協力者のそれぞれは、パートナーから告白されたり (B-F さん)、もしくは自分から告白することで (A さん)、〈パートナーと交際を開始した〉ことが語られた。

〈交際開始〉直後から〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉までの期間におけるパートナーとの関係性の体験の仕方として、4 つの径路が見出された。1 つ目は、C さんと E さんによって体験された、パートナーとの間で〈お互いの内面には踏み込まず、楽しい体験を重ねる〉径路である。中でも E さんは遠距離恋愛でありパートナーと頻繁に会えない環境であったため、自分の内面を見せたり、相手の内面を知るようなきっかけが少なく、2 週間に一度遠出をして“楽しかったね”で終わるような付き合いをしていたことが話された。

2 つ目は、F さんによって体験された〈相互の自己開示を通して、急速に仲良くなる〉という径路である。F さんとそのパートナーの二人ともが、好きな人には自分のことをより深く知ってほしいし、相手のことも知りたいと思う性格であった。こういった性格が影響し、F さんは交際直後から自分のことを何でも率直に話し、またパートナーからも率直に話されることで、パートナーとの間で急速に仲が深まるような感覚を抱くに至った。

3 つ目は、A さん B さんによって体験された〈パートナーのペースに巻き込まれる〉という径路である。A さんと B さんはこれまでの交際経験がなかったためパートナーとどんな風に接すればよいかかわからず、デートの行先をすべて相手に委ねたり (B さん)、相手の趣味の話をはたすら聞いたりといった (A さん)、〈パートナーのペースに巻き込まれる〉付き合いをしていた。そんな状況に違和感や戸惑いといったネガティブな感情を抱くものの、【パートナーに、

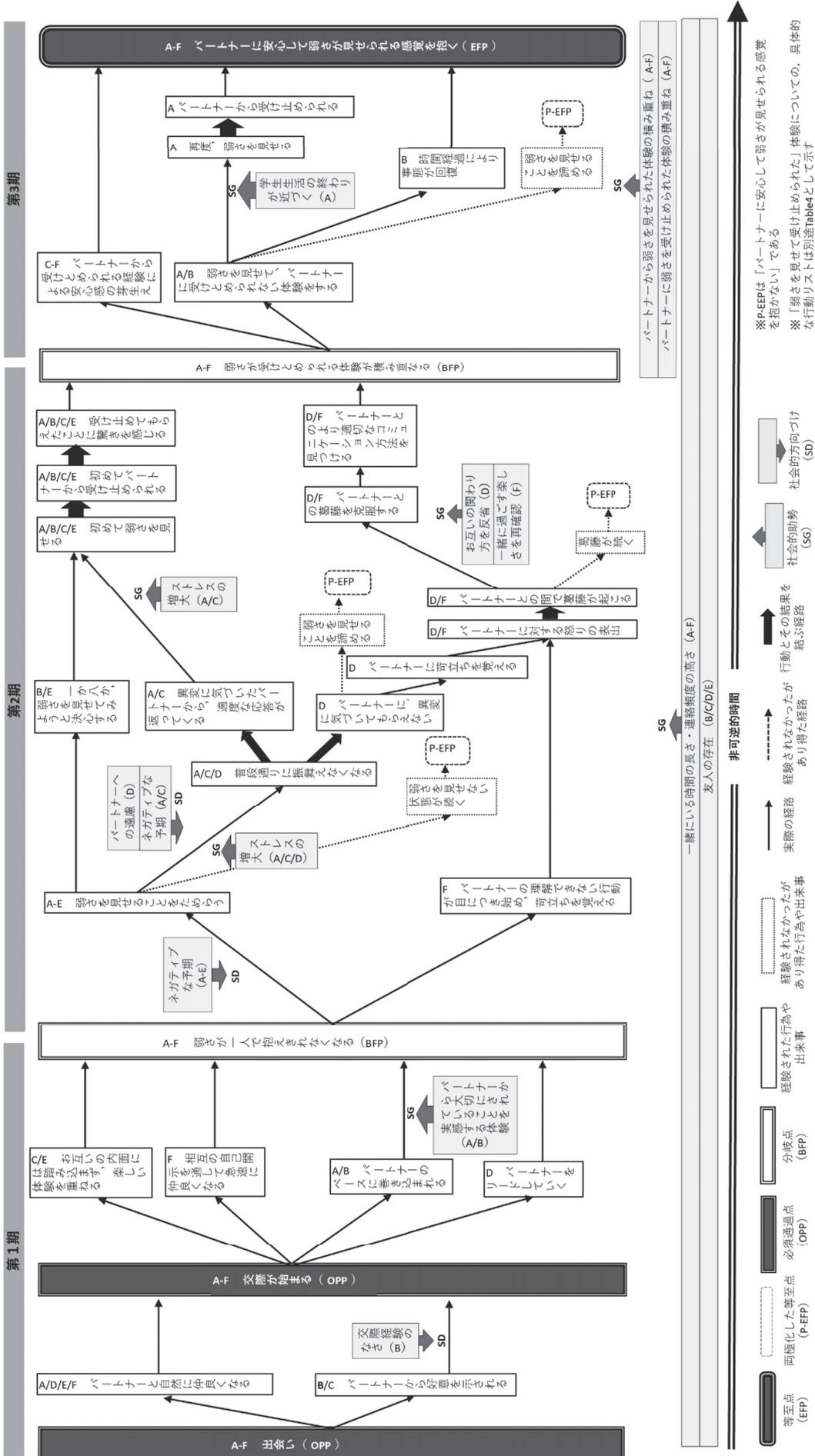


Figure 1 全体 TEM 図

一個人として大切にされた】体験が関係性を続ける支えとなった。Aさんからは、転校するときパートナーから温かい内容の手紙を貰い、一個人としての自分を大切に思ってくれていることを感じて涙が出たことが語られた。また、Bさんは、別れ際に毎回「今日一緒に過ごす中で嫌な思いをしたことなかった？」と聞いてくれたり、自分が嫌な事は絶対にしてこないパートナーの姿をみて自分が尊重されている感覚を抱き、この人ならどんな自分でも受け入れてくれるのかもしれないと思い始めたことが語られた。

4つ目は、Dさんによって体験された〈パートナーをリードしていく〉という径路である。Dさんはパートナーより年下であることから、最初のうちはパートナーが引っ張っていってくれることを期待してデートの行き先などの希望は言わず、パートナーに合わせていた。しかし、付き合いを続けるうちに、パートナー自身はデートの行先にこだわりはないにもかかわらず無理して決めてくれていたことがわかり、また迷子になるなど抜けている部分が多いことに気づき始めた。加えて、Dさんはもともと、自分から出かける場所などを提案したいという性格であった。よって、次第にDさんがデートの行き先などをどんどん提案するようになり、パートナーがそれに合わせるという、二人ともが無理しないでいられる関係性のバランスが形成されていったことが語られた。

研究協力者がそれぞれのやり方で関係性を築いていく中で、研究協力者全員が〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉ような出来事を体験することになった。出来事の内容としては、パートナーからの性行為への求めに応じるに伴い身体コンプレックスを見せることへの恥と恐れ(Bさん)、友達カップルと比べてうまくいかない自分たちに対する苦しみ(Fさん)といったパートナーとの関係性にまつわる内容もあれば、サークル活動がうまくいかないことへの落ち込み(Cさん、Eさん)や就活の大変さ(Dさん)などパートナーとは直接的に関係のない内容もみられた。さらに、家庭や部活でストレスを感じていたところにパートナーから他に気になる恋愛対象ができたことと打ち明けられる(Aさん)など、パートナー

との出来事とそれ以外の出来事が積み重なっている場合もあった。「もうストレスがかかってめちゃくちゃだったんで。(Aさん)」、「(サークルがうまくいかないことについて)なんかそれがすごい辛くて。なんか板挟みになってどうしようってなって。(Eさん)」などの語りからみられるように、研究協力者によって経験された出来事は異なるが、全員が共通して一人では抱えきれない弱さを抱え、誰かに手を差し伸べてほしいような危機的な状況に陥っていたと考えられる。

(2) 第2期：〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉から
〈弱さが受け止められる体験が積み重なる〉まで
①弱さを見せてパートナーから受け止められた径路
(A/B/C/Eさん)

Aさん、Bさん、Cさん、Eさんの4名からは、〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉出来事を体験したあと、それをパートナーに開示し、パートナーから受け止められるという体験をしたことが語られた。この径路を辿った4名の協力者は、最初、弱さを経験しながらもそれをパートナーに伝えるのには〈ためらい〉を感じていた。そこには、一般的なカップル像を意識し、そこから外れた姿を見せたら嫌われるかもしれない(Bさん)、自分はパートナーより年上だから弱さを見せないほうがいいのでは(Cさん)、相手の迷惑になってしまうかもしれない(Aさん)というように、パートナーに弱さを見せることに対する【ネガティブな予期】があった。

そんな中、BさんとEさんは「言おうかなってするのはやっぱり一か八かというか。ひかれて、弱みを見せて離れる人だったらそれまでなのかなって私の中で思って。(Eさん)」「身体を見せるみたいなので、これで嫌われるなら長続きしないっていうのも入ってる。(Bさん)」と話されたように〈一か八か、弱さを見せてみよう」と決心する〉過程を経て、パートナーからの性行為の求めに応じたり(Bさん)、パートナーに悩みを打ち明けて(Eさん)、〈初めて弱さを見せる〉ことへと踏み切った。

AさんとCさんは、弱さを見せることを抑制するように働く【ネガティブな予期】がありつつも、就活やサークルに関する【ストレスが増大して】しん

どさをひとりで抱えきれない状態に陥り、弱さが漏れ出るようなかたちでパートナーに対して家庭環境（Aさん）やサークル（Cさん）での大変さをそれとなく伝えることとなった。AさんとCさんのパートナーは、そんなAさんやCさんの〈普段通りに振舞えなくなった〉姿をみて〈異変に気づき〉、深入りしないけれど温かな〈適度な応答を返した〉。その後、AさんとCさんはさらに【ストレスが増大】したことがきっかけで、サークル活動での大変さや（Cさん）、ストレスが重なって耐えられないこと（Aさん）をありのまま伝え、パートナーに〈初めて弱さを見せる〉ことへと踏み切った。

Aさん、Bさん、Cさん、Eさんの4名は、初めてパートナーに弱さを見せたときに、それが〈初めてパートナーから受け止められる〉という相互作用が生じたことで、パートナーに〈受けとめてもらえたことに驚きを感じた〉。受け止められた体験が生じたときのパートナーの具体的な反応としては、何も言わず話を聞いてくれたこと（Aさん）、自身の裸の姿を見られて何も言われなかったこと（Bさん）、大変さを認めてくれて感謝の言葉を言われたこと（Cさん）、真摯に話を聞いてくれて楽観的に「大丈夫」と言ってもらえたこと（Eさん）が挙げられた。その時の様子について「僕の予想やったら一般的な人やったらそんな知らんがなってなるかなって思ったんですけど、それを聞いてくれたんで、それは大きかったかなと思います。（Aさん）」「もう、わーこんなこと言ってくれるんだって思って。（Eさん）」と、拒否されると思っていたのに、もしくは自分が思っていた以上にパートナーが受け止めてくれたという予想外の体験をしたことが語られた。そしてそういった予想外の体験が、「これからもちょっとしんどいとき頼らせてもらっていいのかなっていうきっかけにはなりましたね。（Cさん）」というように、パートナーに対する更なる弱さの開示を促進する要因になり、〈弱さが受け止められる体験の積み重なり〉へとつながることが示された。

②弱さが苛立ちに変わり、葛藤を経験した径路（D/Fさん）

DさんとFさんの2名からは、〈弱さが一人で抱えきれなくなる〉出来事を体験したあとにパート

ナーに苛立ちを覚えるようになり、パートナーとの葛藤状況を経験していたことが語られた。Dさんは、就活があり精神的、身体的に辛い中でパートナーとデートに出かけていた。せっかく一緒に過ごすのにマイナスなことで時間を取らせるのは悪いという【パートナーへの遠慮】があったため辛さを言葉では伝えなかったが、パートナーの前でしんどそうな様子を見せ、〈普段通りには振舞えなくなっていた〉。しかし、パートナーはDさんの〈異変に全く気づかない〉まま普段通りにデートが進んだ。Dさんはそんなパートナーの様子をみて、自分のしんどさに少しは気づいてくれてもいいんじゃないかと思い始め、〈パートナーに苛立ちを覚えた〉。そして、イライラが爆発するようなかたちで「もう帰りたい！」と〈パートナーに対する怒りの表出〉をすることになった。

Fさんは仲の良い友達カップルと、すれ違いが生まれ始めている自分たちのカップルを比べ、自分たちはこのままだまうまくいかないのではないかという不安を感じる苦境に直面していた。次第に〈パートナーの理解できない行動が目につき始め、苛立ちを覚える〉体験をした。そして、「だからどうして？みたいな。なんでそんなお酒飲むの？とか、なんでそんな女の子と喋るの？みたいな。（Fさん）」のように〈パートナーに対する怒りの表出〉へと進んだ。

DさんとFさんはパートナーに怒りを表出したことで、〈パートナーとの間で葛藤が起こる〉体験をすることとなった。そして、Dさんはパートナーとの話し合いの中で、パートナーから辛そうな様子になかなか気づけなかったこと、気づいても声をかけていなかったことを謝られた。また、イライラを爆発させてしまった自分の振舞いも反省し、【お互いの関わり方を反省】して、改善方法を探していこうと気持ちを切り替えたことで〈パートナーとの葛藤を克服〉することとなった。Fさんからは、パートナーと喧嘩を繰り返す一か月を過ごした後、パートナーと旅行に行つて【一緒に過ごす楽しさを再確認】したことが転機となり〈パートナーとの葛藤を克服した〉ことが語られた。そして、「何も言わずにあたるより、こういうことがしんどいからこうしてほしいとか言ったほうが相手もちょっと分かりやすい

し。(中略) そこからはちゃんと、しんどかったらしんどいって言うふうになりました。(Dさん)」という語りからみられるように、葛藤の経験を通じて、パートナーとの間でうまくやっていくための〈より適切なコミュニケーション方法が見つかった〉ことで、〈弱さが受け止められる体験の積み重なり〉へと進む径路が見出された。

(3) 第3期：〈弱さが受け止められる体験が積み重なる〉から〈パートナーに安心して弱さが見せられる感覚を抱く〉まで

Cさん、Dさん、Eさん、Fさんの4名は、〈弱さが受け止められる体験の積み重なり〉を経験した後もパートナーから受け止められる体験が続いた。そして、パートナーは、この先自分がどんな風になっても受け止めてくれるのではないかと思ひ始めたり(Cさん)、パートナーが自分のことをわかろうとしてくれる嬉しさを感じたりしていく中で(Dさん)、〈パートナーに対して安心感が芽生える〉プロセスが見出された。そして、その後、〈パートナーに安心して弱さを見せられる感覚を抱く〉というEFPに至ることが示された。

一方、AさんとBさんは〈弱さが受け止められる体験が積み重なった〉後に〈弱さを見せて、パートナーに受け止められない〉という相互作用を体験した。そして、パートナーに弱さを受け止めてもらえなかったことによる感情的な混乱を経験していたことが語られた。Aさんは母の死を経験し、そのことをパートナーに伝えたが、パートナーからは簡単な返事しか返ってこなかった。「結構まあ自分にとって母親亡くなったのは大きなことやったんで、ああそんなことしか返ってこないのか、と思っちゃって。(中略) ああなんかひとりだなあってそんなときすごく感じて、寂しかったですね。(Aさん)」との語りからわかるように、Aさんはパートナーの対応に大きなショックを受けた。Aさんからは、パートナーに自分とともに死別の感情を抱えてほしかったが、そこまでは触れてくれなかった寂しさを感じたことが話された。その後、【学生生活の終わりが近づき】、パートナーとの同棲や結婚などの将来を見据えはじめたことがきっかけで、これからの将来をともにし

たいと思うパートナーだからこそ、自分の深いところまでわかろうとしてほしいという気持ちが強くなった。そしてAさんは、母の死についての気持ちを理解してもらえず傷ついたこと、自分の気持ちを少しでも理解しようとしてほしいことを率直に伝えるという、〈再度、弱さを見せる〉ことへと踏み出した。その結果、パートナーが話を聞いてくれたうえでパートナーからも本音を伝えられることで〈パートナーによって弱さが受け止められた〉。そして、お互いに本音を言い合える心強さが生まれ、〈パートナーに安心して弱さを見せられる感覚を抱く〉に至った。

Bさんは、パートナーから会いたいと言われるが、同居している家族がコロナ感染を恐れているため外出できないという板挟みの状態に陥っていた。パートナーに自分の状況を説明し会えないと伝えるも、パートナーからの理解は得られず「ちょっとでも会いたい」と言われ続け、話しても理解してもらえない苛立ちが生じた。しかし、コロナが落ち着き以前と同じ頻度で会えるようになったことで〈時間経過により事態が回復〉した。その後は、これまでずっと話せば理解してくれたからこれから先も大丈夫だろうという【パートナーに弱さを受け止められた体験の積み重ね】が支えとなり、理解してもらえなかった苛立ちを引きずることなく〈パートナーに安心して弱さを見せられる感覚を抱く〉に至ったことが語られた。

第3期では、すべての研究協力者において〈パートナーに弱さを見せて、それが受け止められる体験が積み重なる〉と同時に、【パートナーから弱さを見せられる体験も積み重なっていった】ことが語られた。そして、これらの【パートナーから弱さを見せられた体験】が、パートナーにさらなる弱さを見せることに対する促進的な力として働いていた。たとえば、Fさんからは、付き合ってから半年記念でパートナーにサプライズをしたときに、パートナーが嬉しくて泣き始めたことが話された。そして、驚きと恥ずかしさを感じながらも、素直に気持ちを表現してくれたことが嬉しく、パートナーのことをより一層大事にしようと思ひ始めた転機となったことが語られた。また、パートナーが親にも言えないことを

相談してくれたり (A さん)、パートナーが目の前で泣き出す姿をみたときに (C さん) 自分を信頼してくれている感覚が生じ、自分も同様に弱さをみせてもよいのではないかと思えるようになったことが語られた。さらに E さんは、自分の家庭環境についてパートナーに話したとき、パートナー自身の家庭も実はいろいろあったことを打ち明けられた。パートナーからも同じように自己開示されたことで、お互いの知らなかった部分を知ることができた嬉しさが生じたことが報告された。

2. 2つのSG:【一緒にいる時間の長さ・連絡頻度の高さ】と【友人の存在】

パートナーに対して安心して弱さが見せられる感覚を抱くまでのプロセス全体を通して、【一緒にいる時間の長さ・連絡頻度の高さ】と【友人の存在】の2つがSGとして働いていたことが示された。【一緒にいる時間の長さ・連絡頻度の高さ】については、一緒にいる時間が長かったり、連絡頻度が高いことで、パートナーに弱さを出せる機会が増えることになり、弱さを見せることを促進する土台としての役割を果たしていたことが示された。

B さん、D さん、E さんからは、パートナーとの付き合い方について日頃から相談できる【友人の存在】が、パートナーとの関係を良好に保つ支えになっていたことが語られた。E さんは、家庭環境の悩みをパートナーに打ち明けようか迷っていることを友達に相談し、「話していいでしょ。」と後押しされた。そして、信頼できる友達が大丈夫と言ってくれるなら話しても大丈夫だろうと思えたことがきっかけで、パートナーに家庭環境の悩みを打ち明けることへと踏み切ったことが語られた。加えて C さんは、パートナーが自分以外の女の子と仲良くしている姿を見て不安を覚えていたが、束縛したくないという思いが強く、そのことをパートナーには話せずにいた。そんなとき偶然、同じサークルの友達カップルが話し合いをする場面に立ち会うという体験をした。そして、お互いの思いを率直に伝え合う友達カップルの姿を見て、パートナーと長く関係を続けたいからこそ、パートナーの振舞いについて不安に思うことは相手に伝え、解決しておきたいという思いが

生じた。こういった体験をきっかけに、他の女の子と仲良くしている姿を見ると不安になることをパートナーに打ち明け、話し合うことができたと報告された。

3. 「弱さを見せて受け止められた」体験をしたときの行動リスト

研究協力者が「弱さを見せて受け止められた」体験をしたときの、研究協力者ならびにパートナーの具体的な行動リストを Table4 に示す。なお、「弱さを見せる」と「受け止められる」ことのいずれも、研究協力者本人（弱さを開示する側）の主観的な体験に基づいて分類した。

IV. 考察

本研究の目的は、カップル内で「弱さを見せること」と「受け止められること」に関してどのような相互作用が体験されたのかについて、弱さを開示する側の視点から記述することであった。以下では、本研究によって見出された相互作用のプロセスを振り返り、カップルが親密な結びつきを構築するうえで有用と考えられる臨床的な支援について考察する。最後に、本研究の課題について述べる。

1. 弱さを見せることに関するカップル二人の相互作用のプロセス

(1) 弱さが抱えきれず、普段通りに振舞えなくなる

第2期において A さん、C さん、D さんの3名は、【ネガティブな予期】や【パートナーへの遠慮】という弱さの開示を抑制する力が働きつつも、【ストレスの増大】という弱さの開示を促進する力も働いていた。その二つの力がせめぎ合うことで、弱さを見せようとはしていないが、それが堪えきれなくなってしまう、〈普段通りに振舞えなくなる〉という状態に至っていた。よって、パートナーに対して主体的に弱さを見せる前段階には、弱さを開示しようとは思っていないものの、しんどさに耐え切れず、普段通りに振舞えなくなるという段階が存在していると推測される。そして、その普段通りに振舞えな

Table4 「弱さを見せて受け止められた」体験をしたときの行動リスト

TEM 図での 該当箇所	研究 協力者	パートナーに「弱さを見せる」	パートナーから「受け止められる」
第2期 「初めて弱さ を見せる」	A	ストレスが重なって耐えられないと打ち明けた	負の感情をぶつけても何も言わず話を聞いてくれた
	B	性行為の求めに応じた	裸の姿を見ても批判されなかった
	C	サークル活動での大変さを打ち明けた	大変さを認めてくれて、頑張っている自分に感謝を伝えてくれた
	E	サークル活動での大変さを打ち明けた	楽観的な言葉をかけてくれて、泣いている自分を笑わせてくれた
「弱さが受け止められる体験が積み重なる」(BFP)	A	他の男性と雑魚寝はしてほしくないと伝えた	了承してくれて、伝えたことを喜んでくれた
	B	朝起きられない姿を見せた	二人で出かける予定があったにもかかわらず、「寝ていいよ」と寝かしつけてくれた
		家事が苦手なことを伝えた	苦手な家事を代わりにやってくれた
		他の人に話すと面倒がられる話をした	面倒な話も楽しそうに聞いてくれた
	C	月経前症候群の辛さを伝えた	Cの身体を気遣い、病院の受診や服薬について調べてくれた
		就活の大変さから実家に帰ると伝えた	「相談したら負担になると考えずに、いつでも頼ってほしい」と言ってくれた
		両親にやりたい仕事を反対されたことと相談した	「Cの選んだ道なら応援するよ」と言ってくれた
		他の女の子と仲良くしているのが不安だと伝えた	これからは行動を改めると言ってくれた
	D	就活のことを相談した	就活を頑張っていることを認めてくれた
		生理痛の大変さを話した	生理痛が少しでもましになる方法を調べて教えてくれた
		苦手なことや嫌だったことを話した	Dの思考回路を理解しようと話を聞いてくれた
	E	パートナーの浮気を疑っていたことを謝った	「自分も悪かった」と謝ってくれた
		パートナーに口の悪い姿を見せた	Eと同じ口調でじゃれ合ってくれた
		両親に大学院の学費を出さないと言われたことを電話で伝えた	Eが泣き止むまで無言で電話をつなげていてくれた。奨学金について調べて教えてくれた。
		両親の不仲について打ち明けた	「早く言ってくれたらよかったのに」と楽観的に受け止めてくれて、パートナーの家庭も実はいろいろあったことを話してくれた
	F	男友達とご飯に行くことを伝えた	それを了承してくれた
体調不良で倒れた		学校まで迎えに来てくれて、家に帰ったらすぐ寝られるよう布団を準備してくれていた	
第3期 「再度、弱さ を見せる」	A	パートナーの対応によって傷つけられた体験を開示した	自分の話をしっかり聞いてくれて、パートナー自身の本音も伝えてくれた

くなった姿に対して、パートナーが〈異変に気づき、適度な応答が返ってくる〉体験をしたAさんとCさんは、その後〈初めて弱さを見せる〉ことへと踏み出せた一方で、パートナーに、〈異変に気づいてもらえなかった〉Dさんは、〈パートナーに苛立ちを覚える〉径路へと進んだ。以上の点を踏まえると、普段通りに振舞えなくなっていることをパートナーに気づいてもらえるかどうか、その後に弱さを見せられるかを左右する分岐点となる可能性が考えられる。

一方、パートナーが異変に気付いたとしても、その後の応答が不適切であった場合、関係性は悪化してしまう可能性が推測される。先行研究では、カップルで話し合う場面において、話題を提供する話し手がそれほど苦痛を感じていないときに聞き手からあからさまなサポートを受けると、話し手にとって話し合いがうまくいっていないと感じられることも示されている(Girme, Overall, & Simpson, 2013)。したがって、カップルが親密な結びつきを築くためには、普段通りに振舞えなくなっている相手に気づくだけでなく、そのうえで相手に十分に関心を向け、相手の波長に合わせた自然な応答を行うこと(谷・三田村, 2021)が重要と考えられる。

(2) 弱さを見せて、受け止めてもらえないとき

第3期においてAさん、Bさんの2名は、パートナーに弱さを見せたが、その弱さを受け止めてもらえなかった体験をしたことが示された。そして、Aさんにおいては、【学生生活の終わりが近づき】、パートナーとの将来を見据え始めたことで、これから先の将来をともにしたいこの人だからこそ自分のことをわかってほしいという思いが生じ、パートナーに再び弱さを見せられるようになったことが示された。Bさんにおいては、時間経過により事態が回復し、これまでは受け止めてくれていたから、これから先もきっと大丈夫だろうと感じることで、EFPに至ったプロセスが示された。

こういった結果を踏まえると、パートナーに弱さを受けとめられない体験をしたとしても、パートナーは自分の弱さを受け止めてくれるのではないかといった期待や、この人だからこそ自分の弱さを受け止めてほしいという願いを維持することができ

ば、再び、弱さを見せてそれが受け止められるという相互作用へと再帰できる可能性が考えられる。一方で、本研究の研究協力者の語りからは認められなかったが、パートナーから見捨てられたり、信頼を裏切られるような体験をした場合、情緒的な結びつきに致命的な傷を負うことが指摘されている(Jonson, Makinen, & Millikin, 2001)。そうした情緒的な傷を負った場合では、パートナーに再び自身の弱さを見せることは極めて難しくなるだろう。

(3) パートナーとの関わりを通じたポジティブな感情体験

パートナーとの関わりを通じたポジティブな感情体験は、パートナーに対して弱さを見せることを促進する要因として働いていたことが示された。第1期において、AさんとBさんは、パートナーから手紙を貰ったり、パートナーから「(かかわりの中で)嫌なことなかった?」と氣遣われるという【パートナーから大切にされていることを実感する体験】をしていた。そして、こういった体験がパートナーとの関係を続ける支えとなったプロセスが見出された。この結果を踏まえると、パートナーとの関わりを通して一個人として大切にされていると感じたり、一個人として尊重されていると実感できたときには、強い嬉しさや安心感が喚起され、親密な結びつきの感覚が強まる可能性が推測される。

第3期では、【パートナーから弱さを見せられた体験の積み重ね】がパートナーに対して弱さを見せることを促進する要因として働いていたことが示された。パートナーから弱さを見せられることは、パートナーを愛おしむ気持ちや、パートナーから信頼されている感覚を高めることが示された。さらに、パートナーに弱さを見せたときに、パートナーからも同じように弱さを見せられるという相互作用は、お互いに知らなかった面を知ることができた嬉しさを生み出すことも明らかになった。こういった愛おしみや信頼、嬉しさといったポジティブな感情体験は、パートナーとのつながりの感覚を高めることに加えて、相手も弱さを見せてくれることで自分も出せるといった循環を作り出す機能を持つと考えられる。したがって、パートナーとの間で安心して弱さが見せられる関係性を築くためには、自分だけが弱さを

出そうとすると難しく、パートナーの弱さを受け止める役割を果たせるようになることが重要と考えられる。

2. 臨床的支援の可能性

(1) 弱さを見せることへのネガティブな予期に対して

第2期において、Fさん以外の5名には、弱さを見せたらパートナーから嫌われてしまうのではないかと、迷惑をかけてしまうのではないかとといった【ネガティブな予期】が存在しており、こういった【ネガティブな予期】が、弱さを見せることに対する阻害要因として働いていたことが示された。そして、BさんとEさんにおいては、【ネガティブな予期】がありつつも〈一か八か〉で思い切って弱さを見せて、それがパートナーに受け止められたことが、将来的に更なる弱さを見せられるようになる契機となっていた。よって、弱さを見せることに対するネガティブな予期がある個人に対しては、思い切って弱さを表現してみることへの動機づけを高めるような心理支援が有用であると推測される。動機づけを高める方略としては、大切な他者とどのような関係を築きたいかという価値(Harris, 2009)を明確にすることなどが活用できるかもしれない。

(2) パートナーとの葛藤の克服に向けて

第2期においてDさんとFさんが経験した径路では、パートナーとの葛藤状況を克服した後に〈弱さが受け止められる体験の積み重なり〉に至っていたことが示された。葛藤状況を克服するうえで促進的な力として働いたのは、Dさんにおいてはパートナーと話し合いを経て【お互いの関わり方を反省】し、改善していこうと気持ちを改めたこと、Fさんにおいてはパートナーと旅行に行き【一緒に過ごす楽しさを再確認】したことであった。こういった結果を踏まえると、カップル内での葛藤を克服するうえでは、話し合いや旅行などパートナーと関わることを通して、パートナーや関係性に対する認識が前向きに変容するというプロセスが重要である可能性が示唆された。

パートナーとの話し合いを経て【お互いの関わり方を反省】したことで葛藤を克服したDさんの体験は、カップル間ですれ違いが起こったときに、お互

いを尊重しあって話し合えることがいかに重要であるかを示唆している。赤澤(2015)は、カップルでの葛藤を回避するのではなく、葛藤の解決の仕方が重要であることを指摘している。そして、パートナーとの葛藤解決に有効なコミュニケーションスキルの獲得を目指したプログラムの開発もなされている(赤澤・井ノ崎・上野・下村・松並, 2021)。こういった葛藤解決スキルを身につけることは、カップルが葛藤から抜け出し、結びつきを深める一助となると考えられる。また、Fさんがパートナーと旅行に行き【一緒に過ごす楽しさを再確認】することで葛藤を克服したように、パートナーと一緒にポジティブな感情が喚起される体験を共有することも、葛藤を克服する助けとなる可能性が示唆された。

3. 本研究の課題

最後に、本研究の課題を4点述べる。1点目は、研究参加者の心理的発達の様子がTEM図で示されたプロセスに与えた影響を検討できていないことである。本研究は、青年の中でも18～25歳の大学生・大学院生を対象としており、現在の時点での研究協力者の精神発達の程度はある程度同一であったと推測される。しかし、研究協力者の中には中学時代から交際を始めた者と大学生になってから交際を始めた者が混在しており、過去の時点における研究協力者の心理的発達の様子は考慮できていない。今後は、パートナーとの交際開始時点も視野に入れた調査ならびに分析を行っていく必要があるだろう。2点目は、研究協力者の性別に偏りがあったため、弱さを見せることや、それを受けとめることに関する性差を十分に検討できていないことである。今後は男性の研究協力者を増やし、弱さを見せることに関する相互作用のプロセスにおける性差を検討する必要があると考えられる。3点目は、本研究は、青年の中でも「18歳～25歳の大学生、大学院生」の者のみを対象としていたことである。本研究で見出されたプロセスが18歳～25歳の大学生、大学院生以外の青年においても同様に示されるかについては、今後検討していく必要があるだろう。4点目は、本研究ではカップルの相互作用に関する体験の径路の特徴を示すに留まり、径路の類型化を行うまでには至ら

なかったことである。TEMでは「1・4・9の法則」が提唱されており、9±2人にインタビューを行うことで「径路の類型を把握する」ことができる（荒川・安田・サトウ, 2012）。したがって、今後は研究協力者を増やし、径路の類型を捉えること目指したい。

V. 謝辞

本研究のインタビューにご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 相羽 美幸 (2017). 大学生の恋愛における問題状況の構造的枠組みの構築 応用心理学研究, 42 (3), 234-246.
- 赤澤 淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデートDV 発達心理学研究, 26 (4), 288-299.
- 赤澤 淳子・井ノ崎 敦子・上野 淳子・下村 淳子・松並 知子 (2021). デートDV 第一次予防プログラムの開発と効果検証——高校生を対象として—— 心理学研究, 92 (4), 248-256.
- 荒川 歩・安田 裕子・サトウ タツヤ (2012). 複線径路・等至性モデルのTEMの描き方の一例 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Clinical Applications of Attachment Theory*, UK: Routledge.
- Collins, N. L., Guichard, A. C., Ford, M. B., & Feeney, B. C. (2004). Working models of attachment: New developments and emerging themes. In Rholes, W. S. & Simpson, J. A. (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications*. (pp. 196-239). New York: Guilford Press. (ロールズ, W. S. & シンプソン, J. A. 遠藤 利彦・谷口 弘一・金政 祐司・串崎 真志 (監訳) (2008). 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床— 北大路書房)
- Cordova, J. V. & Scott, R. L. (2001). Intimacy: A behavioral interpretation. *The Behavior Analyst*, 24 (1), 75-86.
- Doherty, N. A. & Feeney, J. A. (2004). The composition of attachment networks throughout the adult years. *Personal Relationships*, 11, 469-488.
- Dorian, M. & Cordova, J. V. (2004). Coding intimacy in couples' interactions. In Kerig, P. K. & Baucom, D. H. (Eds.), *Couple observational coding systems* (pp. 243-256). UK: Routledge.
- Funk, J. L. & Rogge, R. D. (2007). Testing the ruler with item response theory: Increasing precision of measurement for relationship satisfaction with the couple satisfaction index. *Journal of Family Psychology*, 21 (4), 572-583.
- Girme, Y. U., Overall, N. C., & Simpson, J. A. (2013). When visibility matters: short-term versus long-term costs and benefits of visible and invisible support. *Personality and Social Psychology*, 39 (11), 1441-1454.
- 原田 新 (2012). 発達の移行における自己愛と自我同一性との関連の変化 発達心理学研究, 23 (1), 95-104.
- Harris, R. (2009). Act with love: Stop struggling, reconcile differences, and strengthen your relationship with acceptance and commitment therapy. Oakland, CA: New Harbinger Publications. (ハリス, R. 岩下 慶一 (訳) (2019). 相手は変えられないならば自分が変わればいい—マインドフルネスと心理療法 ACTで開く人間関係 筑摩書房)
- Hazan, C. & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In Bartholomew, K. & Perlman, D. (Eds.), *Advances in personal relationships*. (pp. 151-177). London: Jessica Kingsley.
- Johnson, S. M. (1986). Bonds or bargains: Relationship paradigms and their significance for marital therapy. *Journal of Marital and Family Therapy*, 12 (3), 259-267.
- Johnson, S. M. (2004). *The practice of emotionally focused couple therapy: Creating connections (2nd ed.)*. UK: Routledge.
- Johnson, S. M., Makinen, J. A., & Millikin, J. W. (2001). Attachment injuries in couple relationships: A new perspective on impasses in couples therapy. *Journal of Marital and Family Therapy*, 27 (2), 145-155.
- 金政 祐司・大坊 郁夫 (2003). 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, 10 (1), 11-24.
- 金政 祐司・古村 健太郎・浅野 良輔・荒井 崇史 (2021). 愛着不安は親密な関係内の暴力の先行要因となり得るのか? -恋愛関係と夫婦関係の縦断調査から- 心理学研究, 92 (3), 157-166.
- Kanter, J. W., Kuczynski, A. M., Manbeck, K. E., Corey, M. D., & Wallace, E. C. (2020). An integrative contextual behavioral model of intimate relations. *Journal of Contextual Behavioral Science*, 18, 75-91.
- 片岡 祥・園田 直子 (2014). 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 23 (1), 13-28.
- 川本 哲也 (2015). 成人形成期のアイデンティティと複数の社会的関係性の関連: 養育者・友人・恋人に対するアタッチメント・スタイルの違いに注目して 発達心理学研究, 26 (3), 210-224.
- Maher, E. L. & Cordova, J. V. (2021). Behavior analysis

- of couples: Intimacy as a vehicle for change. In Maragakis, A., Drossel, C., & Waltz, T. (Eds.), *Applications of Behavior Analysis in Healthcare and Beyond* (pp. 341-355). Deutschland: Springer.
- Mitamura, T., Hitokoto, H., Tsuchiya, M., & Tani, C. (2022). Development of the Couple Satisfaction Index Japanese version (CSI-J). *Association for Contextual Behavioral Science World Conference 2022*, Poster session, San Francisco, June 14-19.
- 清水 裕士・大坊 郁夫 (2005). 恋愛関係における関係性認知が精神的健康に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 5, 59-65.
- Sternberg, R. J. (1997). Construct validation of a triangular love scale. *European Journal of Social Psychology*, 27, 313-335.
- 谷 千聖・三田村 仰 (2021). 承認による応答が被共感体験に及ぼす効果の検討: 模擬カウンセリングを用いた実証研究の試み. *臨床心理学*, 21 (5), 608-617.
- Tani, C. & Mitamura, T. (2022). The relationship between the duration of dating relationships and intimacy, couple satisfaction—a preliminary study. *Association for Contextual Behavioral Science World Conference 2022*, Poster session, San Francisco, June 14-19.
- 安田 裕子 (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程——治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から 質的心理学研究, 4 (4), 201-226.
- 安田 裕子 (2015). 分岐点と必須通過点. 安田 裕子・滑田明暢・福田 茉莉・サトウ タツヤ (編) ワードマップ TEM 理論編—複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ 新曜社
- 安田 裕子・サトウ タツヤ・荒川 歩 (2012). 第1章 TEM 入門編——丁寧に、そして、気楽に (楽に雑にはダメ). 安田 裕子・サトウ タツヤ (編) TEM でわかる人生の径路——質的研究の新展開 誠信書房

(2022. 8. 24 受稿) (2023. 2. 6 受理)

(ホームページ掲載 2023年3月)